

た。

腹部 CT では、胃小弯および脾周囲のリンパ節の腫大を認めた。除菌治療は PPI, アモキシリン, クラリシッドを 6月17日から30日までの14日間の内服で行った。

除菌後21日目の内視鏡にて胃粘膜所見は改善, 生検上 MALT lymphoma も消失。ヘリコバクター・ピロリは顕鏡, 培養ともに陰性であった。同時期の腹部 CT ではわずかにリンパ節の腫大が残っていたが, 3ヶ月後, 7ヶ月後の CT ではリンパ節腫大も消失していた。

今後, low grade MALT lymphoma の治療として, ヘリコバクター・ピロリの除菌療法が第一選択になる可能性が期待されるが, 除菌成功にも関わらず病変の改善が見られない症例や, 再燃する症例も報告されており, 今後嚴重な経過観察が必要と考えられる。

4) 約12年間の経過後に著しい骨髓線維化を伴う急性白血病に移行した原発性血小板血症

斎藤 弘行・森山 美昭 (燕 労 災 病 院 内 科)
橋本 誠雄 (新潟大学医学部 第一内科)

原発性血小板血症 (以下 ET) の経過中に起こる急性転化は, 服部らは 3.1% と報告しており, 比較的稀なものと考えられる。このたび, 約12年間の経過後に著しい骨髓の線維化を伴い白血化した ET 症例を経験したので, 若干の考察を加え報告する。

症例は, 76歳, 女性。1985年, 陳旧性心筋梗塞の精査のため新潟大学第一内科に入院, 血小板増多 (Plt 77.4万/ul) を指摘され ET と診断された。約1ヶ月間の IFN- α による治療後, 1-PAM 2mg/日の投与を開始され, 漸減しながら1997年5月まで継続された。同年4月頃より貧血の進行と末梢血への芽球の出現が認められるようになり, 骨髓は dry tap となった。その後, 白血球 (芽球) 数の増加や脾腫も進行してきたため hydroxyurea 500mg の隔日投与を開始され, 同年9月に当科入院となった。生検骨髓像は, 著明な線維化と巨核球の増加を呈していた。末梢血では解析20細胞すべてに, 46,XX, der(7)t(1;7)(q21;q22) の clonal な染色体異常を認めた。病型としては骨髓単球性と考えられたが, 巨核芽球の関与も否定はできなかった。入院時の血小板数は正常であったが, その後著減した。入院後の治療としては, hydroxyurea の増量, low dose Ara-C, etoposide 投与などを試みたが効果は一時的で, 白血化から7ヶ月の経過で死亡した。

服部らは, ET から骨髓線維症への病態変化も 0.9% に認めると報告しているが, 本症例の場合は白血化に伴う急性骨髓線維症により, 貧血・血小板減少の急激な進行が生じたものと考えられた。ET 経過中に起こる急性転化は, CMPD の1型としての当然の帰結とも, また抗腫瘍剤などの使用による secondary malignancy とも説明されるが, 本症例の場合は 1-PAM の長期投与による後者の可能性が高かったものと推察される。

5) 血球貪食症候群, DIC で発症した Angioimmunoblastic T-cell lymphoma の1例

高井 和江・高松美砂子 (新潟市民病院 内科)
阿部 暁・真田 雅好 (同 科)
岡崎 悦夫 (病 理)

症例は64歳女性, 高熱, 顔面浮腫を主訴に入院。両側頸部, 腋窩, 鼠径部に 2cm大までのリンパ節腫脹あり, 脾を3横指触知す。WBC 800, Hb 7.5g/dl, Plt. 2.2万と汎血球減少あり, 末血, 骨髓に異型リンパ球を各々4%, 5.4%, 骨髓に血球貪食性組織球を1.8%認めた。腋窩リンパ節生検で Angioimmunoblastic T-cell lymphoma (AITL) と診断。FDP 22.3 μ g/ml, AT-III 53%, TAT 800 μ g/l以上, sIL-2R 30700 U/ml, フェリチン 663.6 ng/ml, β 2-MG 4.73 μ g/ml, IFN- γ 11.1 IU/ml, IL-6 15.1 pg/ml と高値を示し, DIC, 血球貪食症候群 (HPS) の合併と診断。EBV EA-DR IgG 160倍であったが, ISH および PCR 法にて EBV genom は認めなかった。

P-COMET 療法 (PSL, CPA, VCR, MTX, VP-16, THP), 抗凝固療法を開始し, 発熱, リンパ節腫脹, DIC は軽快したが, 2週後には高度の白血球減少をきたし, 化学療法を中断。肺炎, 敗血症性ショック, DIC の再燃, SIADH を疑わせる高度の低 Na 血症をきたし, G-CSF, 抗生剤にて感染症軽快後も大量のカテコラミンを要する低血圧が1カ月半持続した。経食道心エコーで左心耳に壁血栓が疑われ, 抗凝固療法を再開するとともに, リンパ腫 (脾腫残存) に対して T-COP 療法を開始し経過観察中である。[考察] HPS 合併 T 細胞リンパ腫では EB ウイルスの関与する例が多く, 予後はきわめて不良である。本例では EBV の関与を認めず, 検査所見は HPS としては軽度であったことが, 化学療法に反応した要因の1つと考えられる。一方, AITL では, sIL-2R, IFN- γ などのサイトカインが臨床像や組織発生に関与すると推定されている

が、これらのサイトカインは HPS の病態形成にも関与するとされ、本例における HPS 発症との関連が示唆される。

II. 特 別 講 演

「慢性炎症と悪性リンパ腫」

大阪大学医学部 病理病態学教授
青 笹 克 之 先生

第56回新潟癌治療研究会

日 時 平成10年2月21日(土)
午後1時30分より6時15分まで
会 場 新潟東映ホテル
1F 白鳥の間

I. 一 般 演 題

1) 口腔扁平上皮癌における PTHrP 発現と骨シンチグラム所見の関係

亀田 綾子・土持 眞 (日本歯科大学
新潟歯学部歯科
放射線学教室)
佐藤るみ子・原田美樹子 (同 第二
口腔外科学教室)
和田 真一 (同
口腔病理学教室)
岡田 康男 (同
口腔病理学教室)
片桐 正隆 (同
口腔病理学教室)

【目的】口腔扁平上皮癌顎骨浸潤と副甲状腺ホルモン関連ペプチド(PTHrP)の関係を明らかにするため骨シンチグラフィと PTHrP immunohistochemistry を行い検討した。また血清 PTHrP 濃度との関係も検討した。【方法】口腔扁平上皮癌54例の血清 C-PTHrP 値を測定した。初診時生検組織の PTHrP immunohistochemistry (LSAB 組)を抗 PTHrP (38-64) monoclonal 抗体と(1-34) polyclonal 抗体を用いて53例に行った。また、骨シンチグラフィを行っている48例の^{99m}Tc-MDP 集積状態も観察した。

【結果】^{99m}Tc-MDP の集積の有無による平均血清 C-PTHrP 値の有意差は見られなかった。また癌組織内発現との関係もないようであった。【結論】扁平上皮癌顎骨浸潤と腫瘍内 PTHrP 発現、血清 PTHrP 濃度との関連は認められなかった。

2) 尋常性天疱瘡経過中に発症した口腔粘膜多発癌の一例

小林英三郎・森 和久 (日本歯科大学
新潟歯学部口腔外
科学教室第2講座)
又賀 泉

尋常性天疱瘡の経過観察中に口腔粘膜多発癌を発症した一例を経験した。

症例は63歳、女性。初診：1986年12月3日。既往歴：6年前より高血圧症に対し降圧剤内服中。現病歴：約4年前より口腔粘膜に疼痛を自覚し、近医にて局所治療を受けるも改善せず、当科に紹介来院した。現症：全身皮膚には異常を認めず、口腔粘膜広範にびらん性病変を認めた。処置および経過：口腔粘膜の生検結果は尋常性天疱瘡で、PSL 投与により症状は一進一退であったが、初診より約7年後、上顎歯肉および頬粘膜の3箇所に腫瘤を認めた。切除組織診断はそれぞれ扁平上皮癌、疣贅癌、上皮内癌であった。さらに天疱瘡に対しては DDS を投与し、経過良好であったが、その後1年4か月、下顎歯肉に増殖性変化を認め、切除組織診断は epithelial dysplasia であった。約2年後の現在、口腔内に腫瘍は認めず、嚴重に経過観察中である。

3) 舌と食道の重複癌5症例の臨床的検討

高田 真仁・芳澤 享子 (新潟大学歯学部
野村 務・新垣 晋 (口腔外科学
中島 民雄 (第一講座))

舌と食道の重複癌患者5例について臨床的検討を行った。過去10年間の口腔扁平上皮癌一次症例は106例で、舌癌は45例(42.5%)を占め、14例(13.2%)に口腔と他臓器の重複癌がみとめられた。舌の重複癌症例は14例中9例であり、そのうち5例が舌と食道であった。5例はいずれも男性で、年齢は48-74歳(平均64歳)、主訴は5例とも舌の疼痛で食道癌の臨床症状はなかった。全例に毎日飲酒・喫煙習慣があり、特に喫煙指数は600-1400と高値を示していた。舌癌は stage I および stage II が各1例、stage IV が3例であり、5例すべて外科療法を施行し制御された。食道癌の発見までの期間は、同時が1例、1年未満が2例、1-2年が1例、2年以上が1例であり、5例中4例は進行癌であった。治療は、2例が外科療法、1例が放射線療法中心に行われ、2例は姑息治療のみであった。早期食道癌の1例を除く4例は、食道癌発見後半年から1年前後に死亡した。